



ららばい通信

2021年
夏号

特集
『戦争』



画/大野隆司

[目 次]

- INTERVIEW / 戦争の本当の姿を伝えたい 海老名 香葉子 …2
- 特集「戦争」
 - 川島家の終戦 川島 みさ男 …4
 - 戦争、いや すがた すみよ …5
 - 私の物差し 富樫 敏 …5
- 家族の肖像 西館 好子 …6
- 昭和20年という年 …7
- INFORMARION / 「詩人松永伍一戯画～in新潟・警女」展 …8
- COLUMN / おばあちゃんと孫の性教育・男のひとり料理 …9
- 絵解き 風流子ども歳時記 夏の夜の怪談「百物語」の巻 尾原 昭夫 …10
- 連載 直島便り 第13回 「アジサイの苦い思い出」 山根 光恵 …14
- 連載 世界子守唄紀行 第28回 「沖縄の子守唄」 鵜野 祐介 …15
- 子ども配食の現場から ① 樋田 敦子 …16
- 活動報告 …17
- 寄付者名簿

2021年7月発行

世界の 三大子守唄

モーツァルトの子守歌

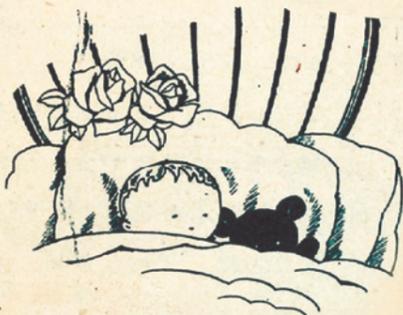
堀内敬三 作詞

一、眠れ よい子よ 庭や牧場に
鳥も羊も みんな眠れば
月は窓から
銀の光を そそぐこの夜
眠れ よい子よ 眠れや

二、家のうちそと 音は静まり
たなのねずみも みんな眠れば
おくのへやから
声のひそかに ひびくばかりよ
眠れ よい子よ 眠れや



三、いつも楽しい しあわせな子よ
おもちゃいろいろ 甘いお菓子も
坊のめざめを
みんなまつゆえ 夢に今宵を
眠れ よい子よ 眠れや



ブラームスの子守歌

武内俊子 作詞

ねんねんころり 母のひざは
夢をさそう ゆりかごよ
ゆらりゆらり ゆらりゆれて
夢の園へ ちちをのみに

二、ねんねんころり 母の歌に
月ものぼる 夢の小道
ひらりひらり ひらりちようちよう
花のかげへ 宿をかりに

シューベルトの子守歌

近藤潮風 作詞

一、眠れ 眠れ 母の胸に
眠れ 眠れ 母の手に
心よき 歌声に
結ばずや 楽し夢

二、眠れ 眠れ 母の胸に
眠れ 眠れ 母の手に
暖かき その袖に
包まれて 眠れよや



令和3年 ららばい通信 夏号を お手元にお届けさせていただきます。

コロナの蔓延とオリンピックという事から「戦争」というテーマが浮かんできました。コロナだけでも大変なのに、オリンピックまで強行しようということはどうしても賛同できません。「復興オリンピック」と称しても、まだ東日本大震災の復興は回復の兆しすら見せていません。

オリンピックをやれば、国民が潤い利益になるという話も聞いたこともありません。利口な国は名乗りさえ挙げていません。オリンピックの意義を問われればクーベルタン男爵の「若人、つまり人間の祭典である」という言があるもので、今の日本にそれをやる意義や価値が果たしてあるのでしょうか。

設備に膨大な費用を掛け、IOCの言いなりになり、利権があちこちで絡み、テレビの中継は世界の都合で夜中になり、コロナ蔓延の中で感染拡大を恐れながら、スポーツの二分一秒の記録を争うのに観客の規制や歓声すらも挙げてはいけないという競技に、共感や喜びを果たして味わうことは出来るのでしょうか。

多くの国民が賛同していない中で、国民を人質として大きな賭けに出たという施政者の戦いはすでに負け戦さとしか思えないのですが。

日本の過去の戦争が何処かこの一連の今と似ているようにおもえてなりません。

一つだけ学ぶことはあります。本当にオリンピックとは何なのか、を今一度考え問い直してみることが出来たということです。見栄や虚勢で大国を気取る愚かさを二度とはしないために。

日本ららばい協会 事務局

オリンピック目前に全国民に呼びかけられたコロナ予防のワクチン接種。私は最初絶対にはやらないと豪語していました。実は今でも懐疑的なのですが、かかっては皆に迷惑するという思いでどうとう接種しました。

ワクチンが騒がれ始めた当初から今も、メールやラインに寄せられた情報は大変な数に上ります。実際に危険を知らせるビデオの映像は真に迫り、その主が医者や看護婦、研究者といった専門職の方たちなので、信じるに充分価値する物に思えます。

まだ未知のコロナは臨床も安全性も保障の限りではないということは承知していましたが、これほど危険な情報なら、真剣になぜ国が、メディアが、検証したり取り上げないのか、今でも不思議でなりません。

コロナ自体が人口抑制剤として作られたものなので若い女性は打たないほうがいいという説も、副作用がつよく接種後に死亡している症例が沢山あるにも関わらず隠蔽されているという事実、患者の遺伝子が操作され個々の遺伝子が体の中で改変してしまうというもの、アメリカのケネ

ディ上院議員の危険とする緊急提言が敗訴したのに国家が関わっているというの、やっつけで作られたワクチンの影響は何年か先に出てくる、その時には接種者はバタバタ死んでいくというものなど、その情報はまさにきりがありません。真実はわかりません。情報化時代の情報の氾濫をどうとらえるか、は個人の判断ということに落ち着くしかないのでしょうか。

老人からはまず死なれてもいいから先に打つ、という乱暴な解釈までしてくる仲間もいます。確かに若い人の未来のためにも優先順位を早くしてあげていいの

ではないか、と思います。

ウイルスそのものがまだ解明されていないのですから、今騒いでもどうにもならないと承知していますが、確かな情報が届かない現代にとんでもない細菌が地球上を泳ぎ回っているのですから、日々混乱が続くばかりです。そんな中でオリンピックに他国から多くの人々が来日しました。強力な菌に変貌を遂げていくウイルスに、さて、どう対応していったらいいのでしょうか。

予防注射やりましたか？

日本ららばい協会 理事長 西館好子

ます。確かに若い人の未来のためにも優先順位を早くしてあげていいの

思い出したくない戦争。戦争を知らない世代が高齢化し、遠い過去に。すべての記憶が追いやられ忘れ去られていきます。小さな記憶を大切にしていきたい。二度とおろかな戦いをしないために。



画／ひらかわしょうじろう

川島家の終戦

川島 みさ男（故人）

昭和19年、みさ男（男性なのに女性のような名前がつけられました）さんの夫の米一さんは、来る日も来る日も沢庵付けに追われていました。海軍陸軍の兵士のために、塩分補給としての沢庵は欠かせない食品だったからです。

大根がとれたので漬物にしようと考えた米一さんの目論見はあたり、全国から注文が無い込みました。

しかし19年には肝心の塩が不足してきて、思うように量産できない状態でした。住まいと店のあった三方ヶ原では、三方原特攻隊が飛行訓練していました。まだ17歳の少年兵たちを我が子のようにかわいがった川島さん夫婦は、彼らを家に呼んで食事をご馳走しました。自分たちの息子も出征しており、横須賀海兵隊で半年の訓練を受け、既に部下を連れて戦艦に乗っていたのです。そのため我が息子と接していません。

19年に息子は戦地に旅立ちました。そして、その年、二つあった三方原の飛行場は二つとも爆撃を受け壊滅状態に。多くの死者が出ました。川島家もあちらこちらと逃げまどう日々が続きました。日記は大学ノート一冊分書かれていました。

〈八月十五日のみさ男さんの日記〉

日本は終戦し天皇陛下の詔が下りました。ああ、負けました昭和二十年八月十五日であります。忘れることのできない悲しい日であります。

どちら方面に退避しようかと思つて飛び回りました。自分だけなら嫌でしたが、下にいる大勢

の子どもを抱えて事故をおこさせたり過ちでもあつては一生の苦勞と思ひまして一生懸命守りました。子どもは無事でしたが、敗戦の憂き目を見ました。

皆気が狂わんばかりに泣き叫びました。男子も女子もみんな泣き崩れ、どうしてこんな命をかけて戦つたのに負けたのか、くやしいくやしいという人ばかりでした。

これから先どうして暮らしてゆくものか、どうせ敵の人々にむごい扱いをされるであろうと覚悟しているものの恐いのです。どうせそんな切ない思いをするくらいなら空襲の爆弾にあたつて死んだほうがましと思ひ過ごしておりました。

日が経つにつれて市外は穏やかです。敵の兵士をみましてもさすが大国のアメリカ人です。見苦しいことは少しもしませんしそれどころか残りのパンなどでも子ども見るとあたえてくださいます。怖い怖いと恐れていた敵国のアメリカ人も恐れおののく事は無いとかんしんいたしました。

私どもは戦争で、沢庵の代金が払えないからと、軍隊から山をもらいました。あれはてた山でしたが、お金は紙くずになり、どうなることかわかりません。

（日記より抜粋、原文のまま）

戦争、いや

すがた すみよ（S10年生れ）

私は教科書が黒く塗りつぶされているときの小学生、疎開先の学校の教化教育は、わらを束ねて案山子を作り、それを竹遣りてつく訓練でした。竹の先を刃物に見立てて、削つてね。

江名という小さな漁村から小名浜市内の小学校まで徒歩通学、子供の足で40分くらいかかります。

通学時にもう何度も機銃掃射にあつて、畑に逃げたり、遂道に隠れたり、本当に怖かったです。ですから、戦争って言葉を聞いただけでもいや。

戦争が終わつて、突然価値観が、百八十度変わるんですから、子どもには何にも信じられませぬ。世の中がどうなつていくのかさえ疑心暗鬼、大人の言うことはどうしてこうも簡単に変えられるのか、不思議でした。

戦争中にやせ細って生き抜いた猫とか、犬とかの方がよっぽど 信じられるし、偉いなあ、と思う。餌なんでももらえないから、猫はネズミ捕つて生きていたし、犬は残飯や草なんて食べて、よろよろしながらも生きていた。でも私は正直な動物を見て、人も働いて食べて生きていかななくてはならないと学びましたね。

犬は野犬が多くなると大殺しにつかまって殺されてしまふし、猫が少なくなると猫いらずが売りに出されて、猫の代わりの葉が売れる・利用されて可哀そうですよ。

何か極限があるとヒトつて、とくに子どもはね、自然をよく観察するようになる。

価値観がどう変わろうと自然は何も変わらない。子どももね、必死で信じられるものを探しているんですよ、きつと。

人間の方は追い詰められるとなにしかずか、狂うか、自暴自棄になるか、自分が自分でわからなくなるでしょう。戦争なんて人殺しにまっとうな理由なんてないし、知らない人なんだから個人に恨みなんてないでしょう。にくいつて思うのが異常で、よく殺せましたよね。人を。

今だつて何処かで戦争が起きている。その国の子どものことを考えたら、ふつうは二度と戦争はしてはいけないと思うはずなのにやつぱりドンパチくりかえしている。基本はまだ「領土」と「差別」が収まらないのでしょう。それに宗教がからんで、人はヒト、相手は相手、とおたがいを認めることができなない。

自然も無くなるし、そのうち本当に全滅してしまふんじゃないですかね、人間も――。

私の物差し

富樫 敏（S8年生れ）

日々何も起きないけれどそれが一番いいことだと思つている。

不足を探さなければ、それで充分だと納得している。

子どもの頃には理屈なんてなかったし、一日退

屈することもなかった。

猫とか犬とか小鳥とか、みんな生きてるよなあ、くらいで言葉らしい言葉もなく。

一緒に寝そべっていたり、居眠りしたりで時間が過ぎていく、それで充分だと思つている。何か、そんなじゃいけないという一生なんて俺は嫌だね。

俺の物差しはこのくらいなんだつて。

生きがいとか、老後の心配とか、ボケるとか皆大騒ぎしているけど、それつてあんまり物や金の利害に取りつかれてしまったから金儲けしないとだめだという迷いや世相が心に沁み込んでしまつたんでないか。

戦争経験者はのんびり日本国を愛そうよ。日が昇り太陽が上り、陽が落ちて月が出て、穀物が実りといった中で、気が向けば散歩して、猫や犬といふようよ。

散々の経験から何にでも限度があるつて学んだんだからさ。

小鳥や蝶々までも少なくなっているのは怖いぜ。大自然なんて関係なく、何にでも充分でないという文明の暴力

に犯されてしまつたら、本当に人間それ自身が破壊じゃないか、年を取るといふこと、戦つた後は短い物差しに合せて、のんびりするのが若き日の戦士の役目じゃないか。



画／ひらかわしょうじろう



昭和20年という年



2月 4日～11日

ヤルタで、ルーズベルト、チャーチル、スターリン会合、ソ連が
対日戦に参戦することを決定

3月 10日

東京大空襲 死者10万人以上

4月 5日

小磯内閣総辞職

4月 7日

鈴木貫太郎内閣発足

4月 12日

ルーズベルト大統領死去

4月 28日

ムソリーニ総帥銃殺

4月 30日

ヒトラー総統愛人エヴァ・ブラウンと共に自殺
(ヒトラーはピストル自殺、エヴァは青酸カリ)

5月 6日

15代市川羽左衛門逝く(長野の温泉地で)

7月 26日

ボツダム宣言

この時日本へは「米英華は日本軍に対し戦争の終結する機会を与える」
「我らの軍事力の最高度の使用は日本本土の完全な破壊を意味する」
などが盛り込まれていた。日本はこれを黙殺。

8月 6日

広島に原子爆弾投下

8月 9日

ソ連軍満州に進撃

8月 9日

長崎に原子爆弾投下

鈴木貫太郎は宮中の地下室で御前会議を急遽開催。

東郷外相は天皇の国法上の地位存続を主張。阿南陸軍相梅津参謀総長は

決戦の主張して対立した。14日になり天皇の聖断が下された

同日夜11時20分から「終戦のお言葉」の録音4枚が出来上がった

近衛師団長森中将反乱軍に射殺される

終戦の報 同日反乱軍青年将校たち自決 阿南陸相自決(割腹自殺)

8月 14日

東久邇内閣成立

8月 15日

連合軍日本駐留開始

8月 17日

マッカーサー元帥厚木飛行場に進駐第一歩

8月 28日

ミズリー艦上で降伏文書調印

8月 30日

「我々は此処に大日本帝国大本営並びにいずれの
位置にある連合国に対する無条件降伏を布告す…」
降伏文書を読み上げた(マッカーサー元帥は署名に
あたり五本の万年筆を使用、三本目は米国政府に
四本目は米国陸軍士官学校に、五本目は自分自身の
荣誉ために) ※諸説あり

9月 2日

戦争犯罪容疑者一斉逮捕令

9月 11日

思想警察を全面撤廃

10月 4日

陸、海軍省廃止

11月 30日



メルボルンから東京まで、思えば長い道のり
だった。しかしついに吾々はここまで来た。

家族の肖像

日本ららばい協会 理事長 西館好子

太平洋戦争終戦から76年、今年もまた八月がやってきた。
青空の下で表わら帽子をかぶりトンポとりに走る子ども姿も見当た
らない。蝉しぐれやどこか遠くから聞こえる夏祭りの歓声や盆踊りの音
頭の声も耳に届かない。一年で一番長い休み期間の夏休みの楽しみは、今
も風景の中に思い出として残っている。
私はそれから大人になり、結婚をして、三人の娘を産み、夫であった人
は超売れっ子の作家になった。日本は高度成長の繁栄で一躍経済大国に
なった。

まさに夜も寝ないで働いた結果には違いないが、生活の落ち着きと同時
に当時のわが家の八月は、何処かちぐはぐな家族の行き違いに、無条件に
明るい夏では無くなっていた。
「ああ、天皇様も(昭和天皇)お年をお召しになって」
終戦記念日、テレビに移されたお姿に父は両手を合わせた。明治生まれ
の父にとって、天皇は犯し難い存在として、生涯あり続けていた。
しかし、それは夫である人にとって逆鱗に触れ
るものであった。「戦争」という実態が様々に検
証され、作家である人の目はより冷静に、より鋭
利に分析する立場となっていた。戦争はなぜ起
きたのか、なぜ止めることが出来なかったのか、
国民に負の部分がある正確に伝えられなかったのは
どうしてか、誰が引き起こし、誰が責任を取った
のか、そして、それは日本人一人一人の問題な
のだというスタンスで、物を書いていた。その人
は、その責任の認識をしていないということに父
にその刃を向けたのだ。

無知蒙昧な庶民の意識こそが罪なのだという説は確かに正しいかも。し
かし、家庭で議論するとなるとこれはとても厄介だ。
「戦争を起した張本人の一人は間違いないお父さんあなたですよ」
父にはその言葉に返す言葉は無かった。 むろん、わが家でその先に議
論に発展することは無かったが、戦後に戦争の被害者はいても加害者とし
て自分を意識する人はあまりいないのは、敗戦の自覚がひとりひとりた
りないということなのだ。
世代間の相違や教育、国のありようで、流れるままに戦争に突き進み
じめな敗戦国となった日本の自国自浄や自ら裁く能力があまりいまいであつた
という作家の目は、間違いと一言わかないが、これには浅草の職人であった父
には理論としてついていけない。
大方は庶民の部に入る日本人への警告が鼻に発せられたわけだが、その
年かなんか毎年八月になると、わが家に緊張が走るようになった。原爆

や水爆などの話題には触れないようにした。となれば黙とうという時間に
頭を下げないということとどがめられた。戦死した多くの親戚が靖国にき
たというだけで物見遊山ということとどなじられた。
戦争という悲劇が生きる人たちの間で、思い出話や笑いの種になつては
いけないというスタンスは、年々夫である人にとっての確信となつていつた
に違いない。

「戦争が良いなんて思っている人はいやしな」それは確かだが、その先
のわが家の崩壊に大いに意味があつたことは事実だ。
といつて私は昔の話をしたのではない。今、コロナという有事の中で、
オリンピックを強硬に推し進めた経緯がひよつとすると戦争への道と同じ
ではないだろうか、そうしたたのは誰の責任か、という問いかけこそ、実は
私たちが自覚しなければならぬ事なのだと思えてきたからだ。
当時は老いた父に戦争責任を問い詰めても、それは可愛そうじゃないと
いった感情が優先していたが、この一年人と接しても密に話してもいけな
い感染症の蔓延の中で、いつ、自分に「病」が
降りかかり、「死」が訪れるという極限状態
は武器をコロナ菌に置き換えれば恐怖は同
類かもしれない。
何のためのオリンピックなのか、誰もが
疑問視し、今では誰一人として平和の祭典
などと思つていない人はいない。楽しむオリ
ンピックではないという宣言まで出されて
いる。

なにも、後先見ずに多くの国から選手を
呼び、安心安全ではないという中でオリンピックは始まった。なぜ誰も止
めることは出来なかったのか、どうして開催に皆がなびかなければいけな
かつたのか。
まさに、反対している人たちが誰も協力しなければ開催したくても出
来ないはずなのに、日々、開催が近づくにつれて気分が高揚してくるとい
うあいまいな日本人の姿が浮き彫りになってくる。戦争も始めてしまつた
のだから仕方ない。オリンピックも始めてしまつたのだから仕方ない。・
確かに此処に大いに元凶がありそうだ。
私は現代社会の単位である家庭のありように大きな変化が来ている
と感じている。
実は世代間を超えて本当のことでぶつかるのを初手とすれば、その先
は、ならば自分はどうな態度で望むのか、毅然と対する時代がきていると
実感している。
家庭はやはり、私たちの教科書だとも感じている。

COLUMN

おばあちゃんと孫の性教育

ららばい会、赤坂シルビィママ
江原 昭子

6才の女の子と4才の弟の話

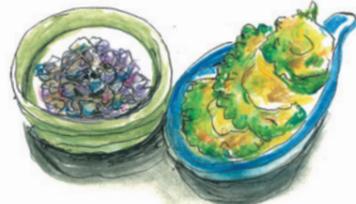
姉…「ねえ、おばあちゃん、女の子は血が出るんだってね」
 弟…「え、どこから」
 姉…「おまたからよ」
 弟…「死なないの」
 姉…「止まるから大丈夫 男の子も出るらしいよ」
 弟…「え まさか 何が」
 姉…「おたまじやくしが出るんだって、そだよねおばあちゃん」
 おばあちゃん…「そだよ、でもあんまり出さないほうがいいよ」



男のひとり料理

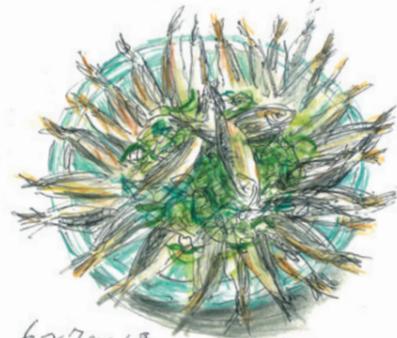
永瀬 嘉平
(元毎日新聞記者、ナチュラリスト)

ゴーヤのみそつけ



沖縄産のゴーヤを輪切りにして赤、ミソにつける。2日もつけると水か出てまじやわかな味になる。ミソをつけたまま日に。にかみかいい。ちよときついな、とおもったら、レーズンで調和する。ゴーヤのにかみか冷酒によく合う。本来なら泡刺しであらう。

小あじの唐揚げ



6~7cmほどの鹿児島産の小あじを唐揚げに。アロックス、ねぎの輪切りに揚げる。岩塩をほらりとふりかける。頭から尾までホリホリと口の中へ。

INFORMATION

「詩人松永伍一 戯画in新潟・瞽女」展 — 縁ありて人生楽し —



松永伍一氏
日本子守唄協会初代会長

詩人 国見 修二

この度、文化の薫り高い新潟県北方文化博物館のギャラリーで、「詩人松永伍一 戯画in新潟・瞽女」— 縁ありて人生楽し — 展を開催いたします。

松永先生は、農民詩や子守唄の研究で知られる一方、独自の民俗学的視点で、民衆のエネルギーや歴史について数多くの評論を書かれました。『日本農民詩史』や『日本の子守唄』などはその代表作です。著書は約170冊にも及びました。その傍ら、油彩の戯画を描かれ、それは趣味の領域を超えた素晴らしい作品で個展も20数回開催されてきました。

2018年3月3日、松永伍一没後10年文学詩碑除幕式が、郷里の福岡県大木町で行われ、そこに参加しました。その時に中学校教師時代の松永先生の教え子であられた近藤征治氏と知り合い、話を伺いました。その中で、松永先生のご遺族が近藤氏に戯画等を託されていたことを知りました。それは近藤氏が信頼できる教え子であると同時に画家でしたから安心して任されたのでしよう。近藤氏の油絵

も今回3点展示しました。

何故、この展覧会が新潟で？との疑問が浮かびますが、新潟と松永先生とは深い関係がありました。著書の中では、越後瞽女への評論、1997年上越市立総合博物館で開催された「斎藤真一が描く高田瞽女 越後瞽女日記展」での文章や『日本農民詩史』での新潟の詩人への評論、県内での子守唄の蒐集なども深く関係しています。それら新潟に関する文章等も展示しました。近藤氏との縁で、今回の展覧会が実現できました。私は学生時代より松永先生を師と仰ぎ詩を書き続けて来ました。「縁ありて人生たのし」は松永先生の著書の題名です。ここでは、戯画を約40点、また、色紙、生原稿、取材ノート、手紙や葉書なども展示しました。松永先生は特に文字が美しい詩人でした。尚、瞽女に関する著作物及び資料を展示しました。ゆっくりとご高覧ください。



【開催概要】

○期間
令和3年9月11日(土)〜20日(月)
10時〜16時(入場無料) 最終日は14時終了
○イベント
9月19日(日)午後2時〜3時30分
講演会と瞽女唄演奏会(800円 北方文化博物館内見学可)
1 松永伍一文学保存会の動向
保存の会代表…鳥取英記

2 新潟と松永伍一 国見修二
3 松永先生と私 西館好子
4 教師時代の松永先生と絵 近藤征治
5 瞽女唄演奏会 横川恵子
6 葛の葉の子別れ等数曲

○展示内容

松永伍一戯画(油絵)約40点、生原稿、直筆色紙、ハガキ、手紙
日本の子守唄レコード、著作物、松永伍一教師時代の冊子等
国見修二詩…5点 近藤征治 油絵…3点

○会場

新潟県新潟市 豪農の館
北方文化博物館 屋根裏ギャラリー
新潟市江南区沢海2の15の25
電話025-3385-2001

○交通

□ 高速道路 磐越自動車道新津ICより約4km 約7分
□ タクシー JR新津駅より約20分、JR新潟駅より約25分

主催 松永伍一文学保存会 近藤征治、国見修二

後援 NPO法人日本ららばい協会、新潟県現代詩人会、高田瞽女の文化を保存・発信する会、高田文化協会

*問合せ先、携帯番号…
国見修二(090022325801)

風流子どもも歳時記

〈夏の夜の怪談「百物語」の巻〉

わらべうた研究家 尾原 昭夫



子供あそび百ものがたり 画者不詳

こわい話とお化けごっこ

「百物語」というのは、夜、数人が集まって、行灯あんどんに百本の灯心を入れ、または百本のろうそくに火をつけて怪談を語り合い、一つ

記」があつて、55編もの怪談が記録されている。(尾原・酒井・大嶋共編『古今童謡を讀む―日本最古のわらべ唄集と鳥取藩士野間義学―』今井出版刊参照)それがいつしか子どもたちの遊びに変わっていく。

の話が終わるごとに一つ灯を消していき、最後に暗闇になった時化け物が現れるとされる遊びである。元は室町時代に始まり、江戸時代には特に武士たちの間で練胆の会として流行したといわれ、元禄時代鳥取藩の武士、野間義学の民俗記録にも「怪談

「もういやだ。早く帰ろうよう。」「おいらは一番強いがお化けは嫌いだ。隠しておくれ。」「長太がついておられますから大丈夫でござります。お泣きでない、お泣きでない。」「などと、この絵からは子どもたちのおびえた叫び声や泣き声が聞こえてくる。私も子どものころそんなこわい経験をしたことがある。近所の遊び仲間3、4人で幽霊の本を讀んでいた時、急に誰かが「お化けだ」と斜め上の方を見て叫んだ。見ると階段の天井から白い物が垂れ下がり、それがお化けの手に見え、まさに身が震えるほどに怖かった。そんな時は集団心理も働くのか怖さが倍増する。また、友人の父が農協の組合長で私もよく知った人であったが、その家は里山の峠を越えた所にあり、ある雨の晩、その谷合の暗がりの夜道を歩いて帰る時火玉が飛んできた。出雲では人魂のことを火玉という。それがこうも取り付けて振り払おうとしても離れず傘いちめに散らばったという実話も聞かされたことがあった。

野間義学の「怪談記」から

前述の野間義学録、元禄ころ鳥取藩「怪談記」から二話を紹介する。(原文を要約、カタカナをひらがなに、また適宜常用漢字に替え、現行仮名遣いに改めて表記する)

第一話「中井五郎兵衛、幽霊二逢事」

中井五郎兵衛、江戸への御使者相勤むとて、相州箱根の辺にて、その日は甚だ雨天にて駕籠も雨具にてまわして行きたりしに、向こうより草履取りの小者あわただしく来たり、中井五郎兵衛様にて候やと尋ぬ。下人その通り、どなた様よりお尋ね候やと尋ねければ、佐分利新右衛門にて候と言ひ捨て行く。もとより中井は佐分利と親しければ駕籠を止めて待合いする所に、とくさ色の甲頭巾を被りて乗りかけ馬にて早打ちに通りに来る者あり。定めて新右衛門ならんと待つ所に、間近く来たり五郎兵衛かと云いて、見上ぐれば先方乗り違えて行き過ぎぬ。佐分利新右衛門は二両年前に死にたり。中井はこれを知らず、この物語を何心なく語りけるに、佐分利が死去のを知りたる者語り伝えて、中井は幽霊に逢いたると取沙汰ありし。

第五十四話「百物語之事」

播州姫路城御天守にて百物語仰せつけられ、九十九に至る時、窓より人の生首を投げ入れたり。何者の仕業とも知れず、その首も誰が首とも知られざりしと。

〔鳥取県立博物館研究報告第40号〕
2003 福代宏氏翻刻による



お化けごっこ 江戸遊戯画帖
津田久英画(江戸後期) 横浜歴史博物館図録より



百物語 吾妻余波
鮮斎永濯画



お化けごっこ 隅田堤花盛 画者不詳

化けものがたり 国明門人画
〔近世子どもの絵本集江戸篇〕より



化けものの唄

江戸時代の赤本や豆本など、子ども向けの絵本には化け物が多い。子どもたちがいかにかに「こわいもの見たさ」といった点で今も昔も変わらないかを示しているようではほえましい。まず江戸後期の豆本から、お化けが何とわらべうたや子守唄をうたうといった奇抜な趣向の例を挙げる。

この絵は「化けものがたり」の一場面で、歌舞伎舞踊の山姥物になぞらえたもの。足柄山の怪童丸（金太郎）の育ての親の山姥が、でん

でん太鼓をたたきながら「あの山越えて、この藪越えて、化けに来た」と子守唄をうたう。すると怪童丸は一つ目小僧に化けて「かアごめかごめ、夜の明けぬうちに、住み家の藪へ、ずるずるつつへいた」とうたう。一方の源頼光ならぬ山姥（きこり）は「小僧、もつと踊れ、踊れ」とはやす。それを見入る客席の面々もそれぞれに化け物なのだ。

〔近世子どもの絵本集江戸篇〕より

次は関西人なら誰でも知っているわらべうた「豆狸」の絵。



豆狸 竹原春泉画
〔絵本百物語〕天保12(1841)国書刊行会より

俗に「たぬきのきんたま八畳敷」というあれである。狸はその八畳敷でもって人をだますとされてきた。それにちなんで、関西では雨が降り出すと、「雨のシヨボシヨボ降る晩に、豆狸が徳利もって酒買いに」とうたうことが広まった。そのあとに、大阪などでは「酒屋のぼんさん泣いていた、なんで泣くかと聞いたらば、豆狸のお金が木の葉ゆえ」とか、「酒屋のかとで瓶割って、いんでお父さんに叱られて、おまん三つで泣きやんだ」などと続けられ、ある種雨の情緒ともなっている。

遠野の河童とザシキワラシ

昔話で知られる岩手県遠野地方には、川に住むという妖怪、河童の話や、家にいつのまにか居座って、その家を裕福にするザシキワラシという子どもの精霊の話がたくさん伝承されている。明治時代にそれらの民俗に目覚めた佐々木喜善が、一生懸命に多くの人々から聞き集めた伝説や昔話は、まず柳田國男に伝えられ『遠野物語』としてまとめられて一躍有名になる。また本人も『聴耳草紙』

河童が馬を引き込もうとして、自分の腰に手綱を結えつけて引張った。馬はびっくりしてその河童を引きずったまま、厩にはいり、河童はしかたがないので馬槽の下に隠れていた。家の人がヤダ（飼料）をやるうとして馬槽をひっくりかえすと、中に河童がいて大いにあやまった。これからはけっしてもうこんな悪戯をせぬから許してくださいといって詫び証文を入れて淵へ帰って行ったそうだ。その証文は今でもその大家の家にあるという。

〔遠野物語拾遺〕二七八 柳田國男



河童 葛飾北斎画
〔北斎漫画三編〕岩崎美術社より

や『老嫗夜譚』そのほかの著述で貴重な記録を残し、民俗学の草分けの一人としての偉業をなした。次にそのなかから河童とザシキワラシの各一話を紹介してこの巻をしめくくろう。

橋野の沢檜川の川下には、五郎兵衛淵という深い淵があった。昔この淵の近くの大家の人が、馬を冷やしにそこへ行って、馬ばかり置いてちよつと家に帰っているうちに、淵の

土淵村字本宿にある村の尋常高等小学校に、一時ザシキワラシが出るという評判があった。諸方からわざわざ見に来たものである。児童が運動場で遊んでおると、見知らぬ一人の子供が交じって遊んでいた。また体操の時など、どうしても一つよけいな番号の声がしたという。それを見た者は、常に尋常一年の小さい子供らの組で、それらがそこにおるここにおるなどといっても、他には見えなかったのである。遠野町の小学校から見に来たが、見た者はやっぱり一年生の子供らばかりだったそうである。毎日のように出たということである。明治四十五年頃の話である。

〔奥州のザシキワラシの話〕佐々木喜善
これとよく似た話が、宮澤賢治の「さしき童子のはなし」にも出ている。

ACTIVITY REPORT

子ども配食の現場から①

樋田 敦子

「今日もありがとございました。家に帰って娘と一緒にスープとパンをいただきます」
「ホットケーキミックスを日曜日の昼食に使用しました。家族でホットケーキを焼きながらの食事はいつ以来でしょうか。いつもありがとございます」

子ども配食の日以降は、こういった写真入りのLINEが届く。

日本ららばい協会では、今年の2月から「子ども配食」を始め、ひとり親家庭を中心に、コロナ禍で困窮している家庭に食料を届けることにした。セカンドハーベスト・ジャパンさんから食品の無償提供を受け、それを皆さんにお配りするフードパントリーを実施しているのだ。

当初は、母子支援相談室で、子どもの未来を築くために、あらゆる相談を受け付けたのだが、相談が一向に来なかった。当たり前である。台東区浅草橋から、葛飾の高砂という地に移転してきたばかり。子守唄協会として21年間活動してきたものの、そんな実績を知る人は、ここでは皆無に近い。ましてやいきなり、自身のことや家の秘密のような相談をする人はいない。「母子支援相談室」の敷居は高く、相談が来ないので、しばらく手探りの状態が続いていた。

相談に来る人を増やすにはどうしたらいいのか。今では全国に5000もある子ども食堂をしようか、という意見も出た。しかしコロナである。3密を避けなければいけない。保健所



の許可が必要であった。食中毒が出たらどうするのか。保険は、すぐにでも始めたいのに、ハードルは予想以上に高かった。

市販のお弁当にしようか、という案が出たが、1食300円程度のお弁当などはフライもあれば、栄養バランスを考えると配れない。またその小さなお弁当を家族で分けるのか。なんともわびしい様子を思い浮かべてしまい、踏み切れない。

そこで浮上したのが、「すべての人に、食べ物を。もったいない」食品を「ありがと」の食品に」というスローガンを掲げて1985年にカナダで設立されたNPOセカンドハーベストの日本支社である。各所から寄付された食料をNPOや支援機関に食料提供してくれるのだ。生ものはないので食中毒の心配もない。これを利用してすることにした。

さて、限定15食でのスタート。困窮家庭にリーチするのはどうしたらいいか。葛飾区には「かつしか子ども食堂・居場所づくりネットワーク」があり、ここでチラシを配ってもらい、LINEで呼びかけた。

配食で初めて見えてきたこともある。理事長は、「彼らは、本当に困窮しているのか」と問う。生活に困っているかどうかは、外からはわからない。いまだき、ぼろぼろの洋服を着ている人もいなければ、明らかにおなかをすかせているような人はいないから。これが貧困問題のそもそもの原点である。現代の貧困問題は、

他人からはわからない。

そもそも貧困って何か。困っているというのはどの状態をいうのか。世の中には貧困・困窮という言葉がまかり通っているのだが、もう一つイメージがつかめない。理事長がまた言う。

「あの人たち、スマホを持ち、電動自転車でやってくるのに、本当に貧困なの」
「限定15食だから、本当に困っている家庭に届けたいのに、あの人たちでいいのかしら」
「私たちは相談業務でお母さんと母子を助けてたくて食料配布を思いついたけれど、これでもいいのかな」

えー、そこを疑いますか、と私は驚く。ひとり親が自分で困っていると感じて、「食料がほしい」と手を挙げることは、かなり勇気がいる。やってきた人すべては、何かに困っている人だと考えることにした。確かに、厳密に見分けることはできないだろうが、それよりも孤立してしまうほうが怖いと思う。

年長者は、「私たちがだって戦争直後は困っていたわよ」と口を揃える。その貧困は絶対的貧困と呼ばれるもの。一方、今の貧困は平たく言うと、人並みの生活ができない、相対的貧困という事で語られる。その相対的貧困で見ると、子どもの7人に1人は貧困なのである。貧困とは何か。本当に困っている人に届くのは、どうしたらいいのか。私たちに与えられた命題なのである。

(つづく)



活動報告

■日本ららばい協会のホームページが新しくなりました！

https://lullaby-japan.com/
ららばいチャンネルもチャンネル登録をお願いします。

母子支援相談も受け付けています。こちらは、子守唄の普及とともに、ららばい協会の根幹をなす事業でもあります。少しでも悩みがあったら、気軽に相談してください。



■児童虐待はNO！虐待防止連絡先

年々増えている虐待を減らすために、おかしと思ったら早めの連絡を。
厚労省 児童相談所虐待対応ダイヤル ☎(局番なし)1899
文科省 子どもSOS相談窓口 ☎0120-0078310
法務省 子どもの人権110番 ☎0120-007110

■6月4日「江戸の子育てと子守唄」の模様がYouTubeチャンネルにアップされました。

藤木雅雄九品院名誉住職のお話「ご縁という宝物」、往來物研究家の小泉吉永さんの「江戸の子育て十か条」講演。そして、子守唄コンサート。江戸の子育ての極意が詰まっています。江戸がいかに子どもを大切にしていたかがしのばれました。後半の西山琴恵さんと藤井秀亮さんの「江戸の子守唄」他、うたの数々についてほろりときました。

■子ども配食は予定通り、第2、4木曜日に継続中です。

当初15世帯でしたが、この長引くコロナ禍で配布を求めるひとり親家庭が急増して、20世帯以上になっています。先日は区役所から「粉ミルクはありませんか」という緊急電話もありました。たまたま寄付でいただいたものがあつたので、配食ともにお渡ししました。
そのお母さんは、ミルクとともに現金も少なくひっ迫していたそうです。少しでもお役に立てばの気持ちで毎回望んでいます。



活動予定

■「ファミリー」コンサート

開催日：令和3年8月28日(金)
会場：グリムの森・グリム館
出演者：沙倉えみ(朗読)、藤井秀亮(ギター)、西館好子(理事、進行)
グリム館 栃木県下野市下古山747
チケット販売、問い合わせは、グリム館 ☎0285-152-1180

■「ふれあいファミリー」コンサート(中止)

開催日：令和3年9月4日(土)
会場：京都市立堀川音楽高等学校音楽ホール
出演者：西山琴恵、雨宮知子(うた)、岸あかね(ピアノ)、江口輝博(音楽家)、安田和子(ピアノ)

毎年恒例になった堀川高校でのコンサートは「竹田の子守唄」等、子守唄の強力なラインアップでお送りします。

■「チャリティ」コンサート(仮)

開催日：令和3年11月2日(火)
会場：霞が関「イイノホール」
出演者：山田邦子ららばい合唱団、川口京子、稲村なおこ、西山琴恵(うた)、はせがわふさこ(ピアノ)

■2022年、日本子守唄学会発足に向け、準備中。

応援がしてくださいます

協会の活動にご協力くださいました皆様、ご寄付を有効に使わせて頂きます。これからも日本らばい協会への応援をよろしくお願ひ申し上げます。温かなご支援を本当にありがとうございます。

2021年4月1日から2021年7月16日現在 五十音順

(敬称略)



「個人」

- 青山成夫
- 青山 司
- 赤坂みどり
- 浅井典子
- 浅利香津代
- 阿部輝彦
- 新井 満
- 井坂義雄
- 井出存祐
- 伊藤守
- 井上麻矢
- 今井要一
- 内野綾子
- 内野経一郎
- 江藤昭子
- 海老名香葉子
- 大泉 勉
- 大川幸枝
- 大嶋孝造
- 大谷智子
- 大西 菊枝
- 大野隆司
- 大平量正
- 小笠原茂
- 岡本喜久穂・あき子
- 奥山糸子
- 長田暁二
- 尾原昭夫
- 帯津良一
- 神長倉万美子
- 金田康男
- 川下則子
- 川島俊六
- 北澤艶子
- 北本かほる
- 木下由美子
- 木村泰雄
- 久世アキ子
- 国見修二
- 黒田 巖
- 剣持英子
- 小泉晶一
- 小山啓子
- 近藤征治
- 酒井董美
- 坂元威佐
- 佐々木愛美
- 佐藤久子
- 佐藤美恵
- 鮫島純子

- 沢田茂子
- 神秀俊
- 菅谷志津子
- 須崎晃一
- 袖山榮真
- 素野 悟
- 田井二郎
- 高橋佳奈枝
- 高松榮子
- 田中厚子
- 谷上昌賢
- 田畑博野
- 千葉 伝
- 辻容子
- 徳永雅博
- 土木正美
- 泊 和男
- 中島富志子
- 永田 亨
- 永見徳代
- 中根宏昭
- 中村金太
- 中元修治
- 中山公子
- 西前幸子
- ノジリ スミコ

- 則武清司・美佐子
- 原 昭邦
- 原田直之
- 彌 信道
- 平川正二郎・一代
- 平沼美春
- 廣瀬俊之
- 福永教正
- 藤石哲朗
- 藤澤昇
- 藤島寛昌
- 藤村志保
- 藤森久美子
- 古川洋文
- 増田義弘
- 松永忠夫
- 松原健之
- 丸山恒子
- 三浦敏昭
- 三浦美智代
- 三上章道
- 宮川久子
- 武藤元昭
- 村井繁雄
- 盛田好一
- きみさん
- 安元稔
- 山川 忠
- 山川敏明
- 山根光恵
- 山本ヤエ子
- 谷村啓子
- 結城天鼓
- 吉田由美子
- 吉原陽子
- 米野宗禎

「団体」

- 銀杏岡八幡神社
- 全国わらべうたの会
- 坊田かずまの会
- 有限会社日本トータルライフ
- よし田



「ご寄付の応援を お願ひします！」

日本らばい協会の活動は、皆様からのご寄付に支えられております。すべての子ども達が希望に満ちた未来をつかめるよう、皆様のお気持ちの託された寄付金を、様々な活動にいかしてまいります。

ご寄付をいただきました皆様は、小冊子「らばい通信」、イベントのご案内、また活動報告をお送りさせていただきます。どうぞ時期や金額に関わらず、年間を通してご寄付をお願い申し上げます。ご寄付への詳細は、日本らばい協会事務局までお問い合わせください。

皆様からのお便り・ご投稿をお待ちしております。

- ◎子守唄について疑問に思うこと・知りたいこと、子育てについて思うこと、親子の思い出話などお送りください。思い出の写真なども募集しております。
- ◎あなたの町の地域活性化のための活動や育児支援活動、町ならではの活動など紹介したい情報がありましたら、ぜひぜひお教えください。「らばい通信」を通じて地域の情報交換をしませんか？
- ◎皆様と共にらばい通信をより良いものにしていきたいと考えております。お気軽にご意見・ご感想をお寄せください。

日本らばい協会事務局 編集人・樋田敦子

〒125-0054 東京都葛飾区高砂3-13-13 三浦ビル1階
TEL 03-6458-0283
FAX 03-6458-0284
Eメール info@lulaby-japan.com
URL https://lulaby-japan.com